

# ほたて貝の想い出

中谷 喜久子



クリートの縁の上に、プリンが十二コもほたて貝のお皿にのって並んでいた。白い貝がらにドロココ色のプリンがよく似合っていた。

「せんせい、買いにきて」

「おじさんプリン下さい、いくらです

か」私はお客さんになった。

○

昔、ずっとむかし幼稚園の先生になったばかりの私の、「せいさく」をする日の朝の仕事はのり作りだった。

「あのー、すみませんがのりを作りますので粉をいただきましたのですが」

園舎とドア一つ隔てた園長先生のお宅の台所へ行って、あり合わせの小さなお鍋に小麦粉を分けていただく。水を入れ、割箸でつぶつぶの無くなるまでぐるぐる手早くかき混ぜる。また水を足して

久しぶりに暖かい日射し、出窓の下の小さな花壇のチューリップが今にも咲きだしそうである。色は赤。

友だちとふざけたりおしゃべりしたりするけれど、すぐすねてぐすぐすしたり、「家へ帰りたい」と言つて泣いてしまう新入園五歳児のR子が、庭の入口のフェンスにつかまってこちらを見ている。そのうちに砂場のそばへ近づいてきた。砂場ではトンネルに水を流しているグループと、お弁当ごっこをしているグループと、端の方でみんなとは関係なしに、大きいボールの中の泥をこねまわしている

N子（五歳）がいた。わき目もふらず一心不乱にこねまわしているそのすぐそばに、いつのまにかR子が来て立って見ている。そのうちにN子と同じようにしゃがんで、背中をまるくし、首をのばして、まるで引きずり込まれるように見つめはじめた。N子はR子に全く気づかぬ様子でボールの中の泥をなでたりこねたり平らにするのに夢中であった。私は真剣なそれでいてうっとりとした顔つきや手つきから、彼女の陶醉している様子を感じた。囲りの子どもたちはお弁当屋からプリン屋に変わっていた。砂場のコン

よくまぜ、コンロにかける。マッチで点火、火は弱火。手は休みなく鍋の中をまぜる。やがて、底の方からかたまってくる。かたまり具合をみながら、またお湯を足す。かきまわす。全体にトロリとなり、小さな噴火口のようにブクッ、ブクッとなったら小麦粉ののりができ上がるのであった。

子どもたちの遊ぶにぎやかな声を耳にしながら「つぶつぶのないように、やわらかすぎないように」と思いながら、少しあせり気味になって作るのだった。それからお鍋を持って保育室へ行き、湯気の立っているあつあつのりを、モトツモトツと小分けするお皿は、ほたて貝だった。いつも使っている（のり皿として）ので表面のうす赤茶色のザラザラはなくなり、内側は白くつるつるしていてちょうどよい銘々皿だった。

湯気のたっているできたてののりは、とても香ばしくおいしそうなので、指でペロリとなめてしまいう子がいたものだった。

今はセロテープ、荷造用テープ、両面テープ、のりはふた付き容器、何でも豊富にそろっていてみんな自由に使っている。もう小麦粉でのりを作ることもしなくなつた。ほたて貝の銘々皿も使わなくなつて久しい。――

○

N子は腕まくりした両手の手首までまっ黒にして、ボールの中をこねたりなでたりしている。R子はすぐ向かい側で砂を指先でいじり出した。N子は「これだよし」というように砂場からかけ出して戻ってきた。「せんせい、これ」と洗った両手をつき出して見せた。

「せんせい、どうぞコーヒードス」  
「ありがたい、ちょうどのどがかわいていたの」

「せんせい、プリンどうぞ」  
「まあ、おいしいこと。どうもごちそうさま」

あまりおいしく食べたので、私の口に砂が少しついてしまった。

「せんせい、ほんとうにたべればだめだよ」

目は子どもたちの姿を追い、耳では子どもたちのおしゃべりを聞き、口では子どもたちとおはなしをしているというのに、もう一人の私は十五年前の朝のひとときを過ごしていた。

とても満ち足りた思いで子どもたちと一緒に、砂場の後片づけをしたのだった。

（八戸小中野幼稚園）